

冬道での転倒者を対象としたアンケート調査 － 歩行時の行動および意識等について －

○富田 真未¹，金田 安弘¹，永田 泰浩¹，鈴木 英樹²

1. はじめに

札幌市では毎年、冬道での転倒による救急搬送者数が約 1000 人にも及ぶ。転倒でケガをした人数は 1 万人にも及ぶという調査結果も報告されている¹⁾。冬道での歩行者転倒事故は積雪寒冷地が抱える冬の問題の 1 つである。著者らも参画するウインターライフ推進協議会では、転倒事故防止を目指した様々な普及啓発活動を行っており、サイト『転ばないコツおしえます。』²⁾で、滑りやすい場所や転倒してケガをしないためのコツなどを情報発信している。転倒しやすい人には「急いでいる人」「雪みちにあわない靴を履いている人」などの特徴がみられ、行動パターンとあわせて注意喚起しているが、これらの内容は複数の関係者による冬道での歩行実態の実際の観察結果を基にしたものであり、定量的なデータによる確認までには至っていない。

2. 調査目的と調査概要

冬道での歩行者転倒事故の要因には、路面の滑りのほか、歩行者の身体能力、転倒防止への意識や備えが関係していると考えられる。冬道での転倒の実態を把握することは、転倒事故を未然に防ぐための解決策を見出すことに繋がり、これまで発信してきた内容にも、より確実な情報として信憑性が増し、個人の転倒予防に対する意識向上に繋がることも期待できる。

そこで今回、冬道での転倒の実態をより詳細に把握することを目的に、Web によるアンケート調査を実施した。

〔調査期間〕令和 5 年 1 月 27 日～3 月 31 日

〔回答条件〕令和 4 年度冬期に冬道で転倒した方（1 回の転倒体験で 1 回答）

〔調査項目〕転倒時の場所と路面状況、転倒によるケガの有無、転倒時の意識や行動、服装、属性、など

3. 調査結果と考察

アンケートの回答総数は、158 件であった。居住地は 85%が北海道在住者であった。

3. 1 転倒でのケガの年齢層による違い

70～80 歳代のほとんどの人がケガをしており、高齢になるほど転んだだけではすまない状況であることがわかった（図 1）。

「路面が見えなかった」「周囲が暗かった」などの回答から、高齢の転倒者が多くなっている要因として、視力の低下により、路面判別がしにくいことや、筋力などの低下とあわせたバランス能力の低下も関係していると考えられる。

3. 2 転倒してケガをした“意識”と年齢

年齢別でみた時の意識の違いでは、「滑ると思って注意はしていた」人は、年齢が高くなるほど増える傾向がみられた。一方、「滑ると思っていなかった」人は、年齢による影響が小さいことがわかった（図 2）。「急いでいた」は若年層の方が多く、冬道でも走ったりできる身体能力や歩き方、スニーカーなどの靴選びなどが関係していると考えられる。

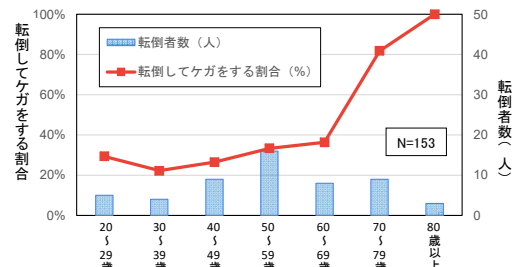


図 1 転倒によるケガの年齢別割合

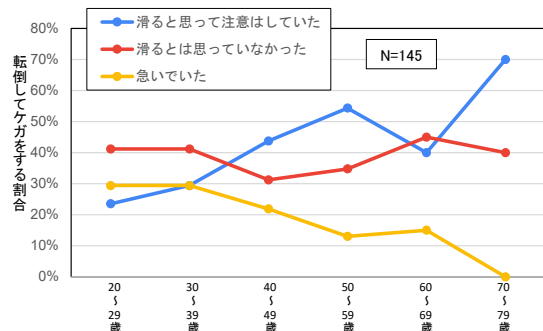


図 2 年齢別にみる転倒してケガをした際の意識

3. 3 冬道にあった“装え”と心構え

「帽子をかぶっていなかった」「夏靴など冬道にあわない靴を履いていた」が多かった。転倒事故によるケガの実態としては、最も多いのが頭部、次いで脚部、腰部、足部の順であり、頭部と脚部を合わせると全体の約 70%を占めていることが報告されている²⁾。頭部を守るための帽子の着用や冬道に合わせた靴選びは、ケガを軽減させるためにも非常に重要であり、外出前の服装について心掛けることは、転倒した際に大きなケガに繋がらないためにも重要な要素である。

4. まとめ

これまで注意喚起してきた転倒しやすい行動パターンについては、本調査結果から概ね同様の結果がみられた。

今後は、より多くの回答数を集め、情報により一層の信憑性が増すよう、紙媒体でのアンケート調査や回答者を道外にも広げる工夫を行い、次年度以降もアンケート調査を実施する。また、次年度は調査項目にケガの内容（擦り傷・打撲など）やケガをした部位（手・足・頭など）などの設問も追加し、より詳細な転倒事故によりケガの実態を把握し、年齢や性別など、ターゲットにあわせた情報提供内容・手法を検討したい。

参考文献

- 1)高野伸栄，戸部啓太郎，金田安弘，2015：札幌市における冬期歩行者転倒事故実態について，寒地技術シンポジウム，31，124-127.
- 2)原文宏，川端隆，小林英嗣，1990：札幌市の冬期歩行環境の安全性について-路上転倒事故の実態調査-，寒地技術シンポジウム，6，151-157.

1 北海道開発技術センター
2 北海道医療大学